

日本損害鑑定協会

第11回損害鑑定フォーラム開催

落雷事故と生成AIテーマに議論

日本損害鑑定協会は11月29日、東京都千代田区の御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンターで「第11回損害鑑定フォーラム」を開催した。メインテーマは「挑戦：損害鑑定を新たなステージへ」。今回は「落雷事故」と「生成AIの最新動向」の二つに焦点を当て、各分野の専門家による講演とパネルディスカッションが行われた。会場には全国から会員所属鑑定人や保険会社関係者が集まり、オンライン配信を通じても多数が参加した。

開会に先立ちあいさつした同協会の太田英俊会長は、全国各地で集中豪雨や暴風、落雷などの自然災害が多発していると報告した上で、こうした状況下でも業界の発展と知見共有を目的に同フォーラムの開催が11回目を迎えられたことに感謝の意を示した。さらに今回は、昨年の第10回記念大会後の「新たなスタート」と位置付け、メインテーマを「挑戦：損害鑑定を新たなステージへ」としたと説明した。

はじめに、落雷事故の損害鑑定に関する講演が行われ、(一社)日本雷保護システム工業会技術委員会委員長の山田康春氏が登壇した。山田氏は雷が発生する気象条件を説明した上で、雷には建物に直接落ちて電流が流れる「直撃雷」と、直撃雷発生時の電磁界で近隣の配電線等に誘導される「誘導雷」があると解説。直撃雷には落下地点の地面を高電位にし、建物内に逆流して複数箇所を影響を及ぼすケースがあるという。

一方、適切な避雷針やLPS(雷保護システム)を設置していれば、落雷による被害は発生しにくいと強調した。山田氏は、火災報知器や立体駐車場などの制御システム、監視カメラといった設備が、近年、落雷を原因として故障する事例が増えていると指摘し、建物の外観損傷だけでなく、内部設備にも影響が及ぶ点に注意が必要だと述べた。また、講演では、風力発電設備のフレードやアンテナが雷によって損壊した事例写真を示し、落雷被害の多様な様相を紹介した。

次に(株)フランクリン・ジャパン取締役の松井倫弘氏が登壇し、雷観測の最新動向を紹介した。同社では日本全国に雷観測センサー網を構築しており、ゴルフ場や遊園地、新幹線基地、ロケット打ち上げ施設などに向けて雷検知データを提供している。日本列島全体では、雷は年間延べ数百万回も発生しており、夏の7〜8月がピークだが、東北地方の日本海沿岸などで冬場に発生する雷には特異点があるという。松井氏によると、日本の冬雷は夏雷の約100倍もの電荷量を持つこともあり、風力発電機1基を破壊するエネルギーを有する例もある。このように日本独特の雷環境があるため、損害鑑定では秋冬にも注意が必要だと解説した。国内では秋田県や石川県で年間を通じて50日近く雷が観測される地域もあり、必ずしも夏だけの現象ではないことが



太田会長



山田氏



松井氏



越前氏



「落雷」パートのパネルディスカッションの様相



「生成AI」パートのパネルディスカッションの様相

最新の現場知見共有、鑑定業務の新たなステージへ

あらためて紹介された。講演後は甘糟鑑定事務所の小森成示氏をコーディネーターとしたパネルディスカッションに移り、落雷事案の具体例をもとに議論が進められた。先の講演に登壇した山田氏、松井氏の他、む

事例では、事故発生後、技術士やメーカー担当者が同行して立会調査が行われた。フランクリン社では、センサーが故障した台のエアコンが故障した

この事例を踏まえ、専門家の立場から松井氏は、センサー観測には一定の誤差が生じ得る点を指摘した上で、「今回のケースではエアコンのセンサーが故障したことが原因による可能性が高い」との見解を示した。

一方、清水氏も実施した立会調査の結果として、故障した4台中3台には基板の損傷がなく、残る1台についてもセンサーが正常だったと説明。これらの調査結果を踏まえ、当該事案では落雷と

いたものの、断定できる物証に乏しかったことから、鑑定上は慎重な判断が求められる事案だったという。

清水氏から紹介された築30年の建物で同時に4台のエアコンが故障した

この事例を踏まえ、専門家の立場から松井氏は、センサー観測には一定の誤差が生じ得る点を指摘した上で、「今回のケースではエアコンのセンサーが故障したことが原因による可能性が高い」との見解を示した。

引き続き、生成AI生成の偽造加工を題材にしたクイズ形式のデモを実施。熱割れした窓ガラスやIICクッキングヒーターの損傷画像を生成AIで作成した事例を示し、簡単な操作で精巧な損害画像が作れる現状と対策を紹介した。

その後、「生成AIの進化によって鑑定人の業務はどう変わるか」をテーマに意見が交わされた。溝渕氏は、現状では生成AIは補助的な道具にとどまり、鑑定書作成や事故状況の判断といった本質的業務は人の判断

さらに同氏は、2021年に発表した「Synthetic Vision(シンセティックビジョン)」と呼ぶAI検出技術を紹介。大量の動画データを解析し、AIによって生成・変更された判定された箇所を可視化して示す検出ツールで、多くの企業・機関に導入されているという。

講演後のパネルディスカッションには、名鑑の山川僚介氏をコーディネーターとして、越前氏に加え、アスカ総合鑑定に加藤達弥氏、湊損害鑑定

の他にも、AI生成文章の判定モデルなどを開発しており、国内外の研究拠点と連携しながら技術基盤の整備を進めていると述べた。

講演後のパネルディスカッションには、名鑑の山川僚介氏をコーディネーターとして、越前氏に加え、アスカ総合鑑定に加藤達弥氏、湊損害鑑定

が不可欠だとし、現場経験に基づく「違和感」や因果関係の見極めは、依然として人間の領域との見解を示した。山川氏も「鑑定人は不審点を粘り強く主張し続ける存在であるべきだ」と述べ、AIを過度に恐れるのではなく、適切に活用しながら感性と経験を磨く重要性を強調した。越前氏は、複数方向から撮影した画像の整合性確認など、現時点で考えられる対策を紹介しつつ、技術と人の目を組み合わせた対応の必要性を示した。